土盛(ともり)※方言名：トモリ

奄美大島でも有数のビーチとして知られる土盛海岸。真白い砂浜と青い海のコントラストは多くの観光客も感嘆する風景です。海を眺めると、沖の方には喜界島が黒絵のように浮かび、丸瀬岩や子抱き岩と呼ばれる石も見ることができます。

1 喜子川遺跡

喜子川遺跡は昭和57(1982)年に発見された。昭和62(1987)年～平成4(1992)年まで青山学院大学の田村晃一教授を団長とする喜子川遺跡調査団と旧笠利町教育委員会の合同発掘調査が7回行われた。調査の結果、下層からチャートのチップ、ＡＴ火山灰、集積遺構、厚手土器、アカホヤ火山灰、爪形紋土器が層位的に確認された。

2 マツノト遺跡

マツノト遺跡は平成２(1990)年に砂取工事中に、真向かいの喜子川遺跡の調査を行っていた調査団によって遺物の散乱が確認され、翌年に緊急調査が行われた。弥生時代、古墳時代、古代相当期の文化層が確認され、大量の焼けたヤコウガイ集積遺構や外来から持ち込まれた新発見資料が多く出土し注目された。

3 子抱き岩(土盛海岸)

子抱き岩(クワァダキ岩)のある土盛海岸は美しい海岸だが、潮流の流れが複雑で危険な場所でもある。

子抱き岩は石灰岩の上に砂岩状で楕円形の岩が乗っている。その格好が子供を背負っている様子に似ていることからその名がついた。また、土盛沖合で白波が立つ場所はザンノス(ジュゴンの巣)と呼ばれている。

4 ミキモリ

奄美各地には神山、オボツヤマとされる聖域的なところがある。古老によると「ミキモリも昭和50年位まで旧9月9日にミキオバ（人名）が祭事を行っていた。」という。この場所は神高く、お祓いなどが必要で、むやみに木の枝などを切ると祟りがあるといわれている。

神道は農道を挟んで集落からここまで続いている。

5 タカラノモリ

集落のはずれにある小高い丘一帯はシマの皆さんが浜下り行事などを行う場所でもあった。この丘に登ると頂上は意外と広く、憩いの場所であることがわかる。

古老は「ここは交易上の見張り・魚の遠見番、そして信仰の山でもある。別名はマジムン（ハブ）森ともいう。」と話し、ハブに注意が必要である。

6 カミヤマ

集落中央あたりに位置する微高地は神山だったという。現在は平坦になり、雑草が生えて放棄地になっている。

農道を挟んで南側にミキモリが位置しており、何らかの関連性があると思われる。現在祭事は行われてないが、この地で八月踊りが行われ、集落の中心地(ミャー)と考えられる。

7 ガジュマルの巨木

奄美の海岸線にあるほとんどの集落は防風樹としてガジュマルが植樹されていた。土盛も例外でなく屋敷林にはガジュマルが多く使われており、昭和50年代に教育者・故吉田哲夫氏が作詞・作曲した「土盛音頭」でもガジュマルが多く残るシマの風景がうたわれている。今でもその名残の巨木が残る集落である。

8 共同井戸

土盛集落の西側から北側に蛇行し海に流れるキシゴウ(喜子川)は生活用水として使用し、飲料水は共同井戸を利用していた。共同井戸は数か所あった。集落の少し高台にある共同井戸は昭和54年頃まで水が湧き出して流れるほどだったという。水汲みに来るご婦人方の井戸端会議の場所にもなっていた。